

平成22年度戦略的研究開発プラン採択課題一覧

番号	実施機関	課題名	研究の概要	(実施年度) 研究費総額	共同研究先
1	環境衛生研究センター	温泉等入浴施設におけるレジオネラ属菌の衛生管理に関する研究	本研究では、重要な観光資源である温泉について、レジオネラ属菌の実態調査を行う。また、厚労省が推奨している塩素消毒では、pHが高いと消毒効果が低下するため、アルカリ泉が数多く存在する和歌山県の温泉にとっては塩素消毒を用いない効果的な管理方法の検討も必要である。そのため、紫外線照射等の殺菌方法で消毒効果の検証を実施することにより、各泉質に適した「レジオネラの衛生管理マニュアル」を作成し、運用を促すことで安全かつ安心な入浴施設の確立を目指す。	(平成22～24年度) 15,957千円	ローレル株式会社 (財)中央温泉研究所 食品・生活衛生課 各保健所(支所)
2	農業試験場	梅調味廃液を利用した高窒素・低臭鶏糞堆肥の製造による資源リサイクル	年間18,000トンに上る梅調味廃液は多くが産業廃棄物として処理されている。そこで、未利用資源である梅調味廃液を農業生産に活用する。梅調味廃液のpHが低いことを利用して、鶏糞堆肥過程のアンモニア揮散を抑制し、高窒素低臭鶏糞堆肥の製造を行う。このように廃棄物系バイオマスを農業生産に活用し、梅調味廃液の農業利用の促進と農産物生産にかかるコストの削減を図ることで、資源リサイクル農業の展開と梅加工業の発展に寄与する。	(平成22～24年度) 16,623千円	紀州うめどり・うめたまごブランド化推進協議会 紀州みなべ梅干協同組合、紀州田辺梅干協同組合 紀州みなべ梅干生産者協議会、JA紀南うめ特別栽培研究会 農業試験場、畜産試験場、うめ研究所、養鶏研究所
3	果樹試験場	モーションセンサを用いた害獣追い払いシステム開発	和歌山県では鳥獣による果樹被害が発生しており、鳥獣由来感染症が全国的に見ても発生している。そこで、人間生活と鳥獣の明確な分断を図るため、鳥獣の接近を検出するモーションセンサを用いてLEDや花火などを組み合わせた忌避装置開発する。特に加害獣の生態や効果の調査により、効率的な設置時期と場所を明らかにし、安定した獣害防止技術の体系化を図る。	(平成22～24年度) 9,800千円	タカショーデジテック 果樹試験場 農業環境保全室
4	工業技術センター	ANAMMOX反応を用いた低コスト窒素除去技術の実証試験	和歌山の各工場では多大な費用を掛けて排水基準をクリアしているが、全国的に排水規制の強化の流れもあり、和歌山でも今後、規制が強化されることが予測される。そこで本研究では日本最速の窒素除去速度が得られている一槽型のANAMMOX反応システムを染色排水の処理に応用するための実証試験を行う。この試験で目標処理速度が達成できれば、非常に小さな処理槽で窒素除去が可能となる。本技術は染色排水以外の排水にも広く適応が出来ると考えられるので、規制が強化された場合にも適応可能となる技術である。	(平成22～24年度) 23,600千円	オーヤパイル(株) 熊本大学 工業技術センター
5	かき・もも研究所	モモの難防除病害せん孔細菌病の生態に関する研究	モモせん孔細菌病は温暖化に伴い多発傾向を強めており、発生は年次間差やほ場間差が大きく、発生予察が困難で有効な防除資材も少ないことなどから、難防除病害となっている。現段階においては、本病の発生生態がほとんど不明で、防除対策においても防除効果が不十分である。そこで、特定病原細菌のみを効率的に分離できる培地と遺伝子検出技術を開発することで、効果的な防除技術の確立に向け、病原細菌の動態を明らかにする。	(平成22～24年度) 4,984千円	紀の里農業協同組合 かき・もも研究所 那賀振興局農業振興課
6	暖地園芸センター	スターチス培養苗の効率的生産技術開発	スターチスのオリジナル品種の種苗供給は無菌操作と培養室不足により生産量が制限されてしまう。本研究では供給能力の向上と種苗の低コスト化を目的として、①効率的な増殖法の開発、②クリーンベンチを用いない有菌下での組織培養技術の開発、③クローラー温室での発根・純化技術の開発等を行う。このことにより、オリジナル品種の種苗供給が増加し、生産農家の種苗費の低減が図られ、農家所得が向上する。	(平成22～23年度) 5,000千円	(財)日高側町ふるさと振興公社/バイオセンター中津 京都大学大学院 暖地園芸センター
7	工業技術センター	草木染料を活用したファッションレザーの開発	近年、工業用草木染料が開発され、利用が簡便で抽出残渣などの廃棄物が染色工程で発生しない液体状態で供給されており、比較的大規模な工業染色においても利用が可能になってきた。本研究においては、工業用草木染料を活用し、国内エコレザー基準を満たし、かつファッション素材として要求される色彩表現範囲と必要な消費者耐久性を有した皮革材料の製造技術開発を目指す。	(平成22～23年度) 3,500千円	藤本安一商店 (有)トミタ工業、(有)ハヤシ 上田安子服飾専門学校 工業技術センター繊維皮革部